単元展開の一工夫

小学校四年の社会科　「大きな町」の指導記録

一、展開例

足利市立北郷小学校　川　島　邦太郎

單　元「大きな町」の展開例

目標　郷土の仕事や暮しはその地形気候資源交通や都市の分布などの様子と深い関係を持っていることを理解させ、それらの観点から現在の郷土の生活を観察したりその昔の様子を考えたり、また郷土の中に於ける自分たちの町の特色を知り郷土の生活の将來について一そう深い関心をもつようにする。

小単元	目標	学習内容	指導例
(一) 私たちの町しらべ (16時間)	○郷土のしらべ方について知る ○私たちの町はどのようにして発達して来たかを理解する ○小規模経営の現実を知り郷土の生活に関心をもつようにする ○人々のくらしの工夫についてしる	1.大きな町にはどんなものがあるか 国内の主な町 県内の〃 2.私たちの町のくらし ①足利のようす 区域面積人口 地形の概観 ②足利の特色 ○工業町（織物町） ○小規模経営 ○内職の町 ③足利の織物 ○銘仙のへんせん ○その他のせん維製品 ○工業製品 ④足利の発達	○絵ハガキ写真あつめをさせておいたためか非常に興味をもった ○自分たちや親たちが行った町をあげて見る ○教科書(東書)の大きな町の「私たちの町しらべ」によって調査方法を研究する ○白地図の利用○人口密度表により旧市・新市の人口のちがいを知り「その人々はどんな仕事をしているか」……これより出発した ○職業別世帯数のグラフ利用 ○教科書の例の町との比較をして足利の特色をはっきりさせる ○足利の将来について考えさせる
(二)銅の町　足尾 (15時間)	○足尾の地形の特長がわかる	①足尾のようす ○面積区域人口 ○地形の概観 ∨字形の谷合にできた町	○足利市と比較して考えさせる 面せき　人口 足利　1　1 足尾　2　5分の1 栗山　4　30分の1

	○銅山町の生活の特色や生活の工夫について理解する ○足尾の銅の生産とその苦心がわかる ○産業の発達と町の盛衰の結びつきがわかる。 ○災害には人々の努力によってなくすことのできるものが多いことに気づかせる	②銅山町のくらし ○職業分布 ○食料品 ○交　通 ○社　宅 ○協同組合 ○医療施設等 ③銅山のしくみと規模 ○採鉱　搬出 ○選　鉱 ○せいれん 自溶せいれん 硫酸工場 ○浄　水 ④足尾のれきし ⑤鉱毒事件と 田中正造	○足尾の写真の展示 ○銅山町のくらし 「どんな仕事をしているだろうか」のテーマで出発する ○業種別世帯数のグラフの利用　足利のそれと比較 ×食糧の問題に関心が強いのでこれより考えていかせる ○採鉱の様子げき化させる ×坑道の広さ ×〃長さ ×安全さ ×水 ×新鉱の発見等について一そう関心をむける
(三)栃木県の工(鉱)業 (3時間)			
(四)県庁のある宇都宮市 (10時間)			
(五)日本の大きな町 (3時間)			

二・課題　本単元を展開するに当って、自分で最も意をそそいだのは次の三点です。

(一)学習意慾の問題　目標を達成するために如何にして子供に学習意慾をおこさせるか。子供達が本当に自分のもんだいとしてとっくんでいくような学習をさせていきたい。

(二)教科書の位置づけ　中学年の教科書の取り扱い方については、どこでも問題になっている。資料集の二頁にもそのことが述べられているが具体的にどう取り扱うか――これが二番目の問題です。

㈢何を見、何を学習させるか　社会科は社会的な事実を見ながら社会のしくみやはたらきを知り社会についての見方や概念をつかませることだ」というが、それでは実際に何を見、何を学習させるか

以上の三点について特に心をくだいてきたので以下展開の順序に従ってこれらのことを述べていきたいと思います。

三．単元構成について

資料集では工鉱業の町としての「足利と足尾」「県庁のある町としての宇都宮市」と二つにわけて取り扱うようになっているが私たちの場合はその足利の住人であるところから、足利を導入の単元として取り扱い足利の特色を栃木県に於ける立場でもう一度はっきりさせ、その足場の上に足尾や宇都宮を学習させそして尚県下における大きな町のいくつかを概観していくように構成した。

四．子供の実態

㈠自分で行った町（四十六名の在籍）

東京……二十三名

佐野……四名

宇都宮……三名

太田、桐生、高崎……遠足で行っている

以上の如くで県内の大きな町に行った経験のある者は非常に少い

㈡足利市の一員であるという観念がとぼしい、合併以来（昭和二十九年）日が浅いためか、未だに「足利へ行ってきた」というような話しをし、何か足利が別の町のような気がしている

㈢足利市の位置やはたらきについての知識が漠然としている。……足利市の周囲の町村はどこか、足利は何の町か……こうした質問に対して何かはっきりとしたものをもたない。三年での学習や四年の始めに取扱った「私たちの町と栃木県」の学習で一応理解されていたと思っていたが、指導のまづさか或いは忘却したためか右のような状態であった。

以上の子供の実態に基いて学習の展開を計画していった

五．展開の実際

㈠私たちの町しらべ

以下順序に従ってその具体例をあげて見るが紙面の都合でそのうち特に問題になる点についてのみ記録していくことにします。

1．　大きな町にはどんなものがあるか（省略）

2．　私たちの町のくらし

○教科書（東書）の「大きな町」の「私たちの町しらべ」を読む、そしてどんな調べ方をしていったか――そこへ線をひいてみた～即ち調査の具体的方法を教科書を参考として出してみた。そしてそれにもとづいて

○足利について調べる方法を考える

(1)古い地図と新しい地図

(2)鉄道はいつしかれたか

(3)工場はいつごろ出来たか

(4)どんな工場があるか

(5)どんな公共の建物があるか

⑹足利はいつごろから開けたか

以上のような方法が考えられた。そこで

①足利のようす

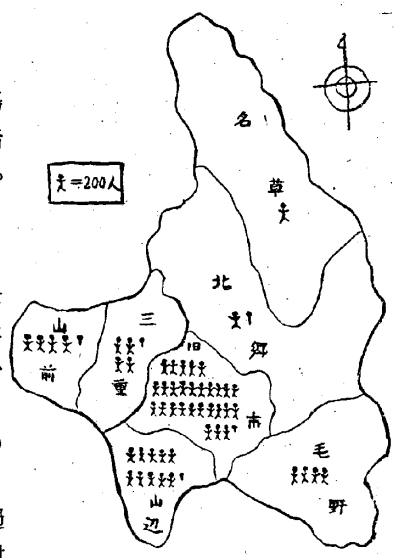
②足利の特色

この学習を右のような具体的な調査方法によって展開しようとしたのであるが、前述のように足利についての認識が誠に漠然としている。足利の特徴は何かという質問についても「足利は織物の町だ」と答えるもの四・五名であとはぼんやりとしていた。

次に足利の町へ行ったか〜町にはどん家や建物があるか〜これに対しては殆んどが商店（本屋、菓子や、そばや、高島や等）のみを上げる。そこで郷土地図で「足利市で人が多く住んでいる所はどこか」と発問一旧市内に人口が密集していることを再確認する。

尚別表の人口密度表を模造紙に書いて掲示し人口分布の状況を、一そうはっきりとわからせた。そしてこの表より

人口密度表（教授資料あしかがより）



○まわりの人口はなぜ少いか（新市域）

○まわりの人達はどんな仕事をしているか

こうした問題を提出した。こんどは自分たちの生活の場の問題であるので、今までの無気力な学習が一変して活気をもち、即ち学習意慾を大いにもやした雰囲気になった。

×農家が殆んどで約九割を占めている

学級内の児童の家庭を調査して見ると右の如くで他に公務員三、僧侶一、医師一、商業三　他に農業を営むかたわら、よりややはた織り（五、六台の織機で）をしている家若干がある

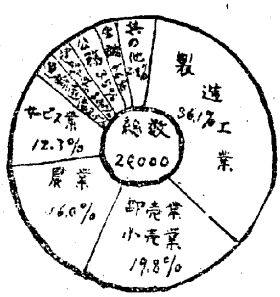
×町の工場へ通っている人もいる〜約十四、五名の児童の家庭で兄や姉が通っている

○なぜ工場へ行っているか——この問題より耕作面積、過剰労力、経済関係が考えられ、子供ながらも日本の農村に課せられた大きな問題について眼をむけることができたと共に社会のしくみやはたらきの一端についての理解が深められた。

○町の工場へ行っている人はどんな工場に通っているか

足利の主な産業は工業であり又工業の中でも織物がその中心であること等の現情がこうした問題から出発して考えられた。

業種別世帯数（昭和30年現在）



且、上表の職業別世帯数のグラフを掲示することによりこうしたことが一そう明確になった。

このような学習がされてから「私たちの町しらべ」の方法として考え出しておいた前述の六つの問題も自分の問題として研究するようになり、足利の特色をつかんでいった。

③足利の織物（銘仙の変せん）

この問題については自分達の家で織機はあるが現在織っている家は殆んどない（農業のひまな時に母親などがしていたが

）実態から考えさせ服装の推移と共に足利の織物界も大きく動いている現実を考えさせた。

○こうして自分達の身近な現実を通して足利の特色や人々のくらしの工夫についての学習をすすめ、一応足利の特色がはっきりした所でもう一度教科書の「私たちの町しらべ」をよんで教科書に出ている町の様子と足利のそれを比較させることにより一そう足利の特色をつかませることに力をそそいだ。

(二)銅の町足尾

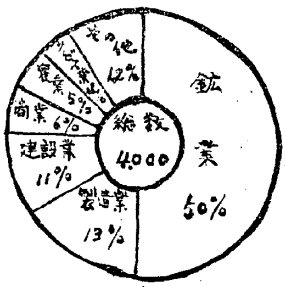
1. 足尾のようす　　栃木県地図によって足尾の位置や地形の概観をしたのであるがより具体化させるべく、自分たちの住む足利それに前に学習した山村の場合の栗山村と比較して見て地形の情況を考えさせた。V字形の谷合いの町これは足尾の写真を見ることにより、はっきりとしてきた。

尚、面積と人口の割合の比較表を作らせて見ることにより、足尾は面積では足利の二倍であるのに人口は5分の1であること、これを栗山のそれと比較して山間の町としては非常に人口が多い「それはなぜか」ということにより銅山町足尾の学習へのモチベーションができた。

2. 銅山町のくらし

○足尾の人々はどんな仕事をしているだろう。　「こんな山奥にどうして町ができたか」こうした前時の学習より銅山につとめていることは考えられた。次に何によってそれが、一そうよくわかるか～それには足利の時のようなグラフがあればよい～それはどこにあるか～こうした資料の必要を考え資料活用の心構えを養いつつ、別表の（業種別世帯数昭和30年現在）提示によって銅山町のくらしを理解させていく。

業種別世帯数
（昭和30年現在）



○大多数即ち約半数が銅山につとめ、製造、建設の仕事も結局銅山につながっている現状より町の人殆んど全部が銅山の仕事をしている。足利の織物の場合の表と比較して一そう明確になった。

○銅山町のくらしのようす

その他写真や地図を掲示することによって土地の様子をより具体的にし、次に前表より農家の割合が非常に少ない～これは子供たちが農家の子弟が多いので～事から

×農業が振わないのはなぜか

×食糧はどうしているのか。

こうした問題を考えさせた。結局食糧は全部他地域よりもち込まなければならない、どこからどの道を通ってということになり、足尾線細尾峠がもち上り、交通のもんだいもからんで日光の精銅所とのつながりも考えることが出来た。

なお商店の少いことより安くてよい品物を、同じ職場にはたらく多くの人の立場から、協同組合の必要性を考えさせた。

そして銅山町の人々が種々な困難と戦いつつ生活をしている姿を自分たちの生活と比較しながら考え、生活の工夫についてわからせていった。

3. 銅山のしくみと規模

○銅山のしくみ…・採鉱、搬出、選鉱、せいれん　こうした問題は掲示された写真や絵などによって見ると共にスライド「坑内見学」をも取り上げたり、尚教科書にある炭鉱や精銅所のようすの写真などを参考にしつつ教師の説明を主とした展開が行はれた。

×劇　化

しかし何とか子供達に本気になって学習していく意慾をおこさせるため、劇化を企てた。本校においては児童の抑圧感を排除し子供の本当の声をきくために、毎週土曜日に一時間えんげきの時間をもうけているのであるが（これは別項に詳細出ているので省略する）社会科の学習にも時にこれを取り入れての指導を試みている。

○三年の例

大昔の人の学習のさい、実さいに近所の川から手頃の石をひろわせ、これで木をきる所をやって見る。子供にとってはそれが劇であると共に学習である。単なる話でなくどれだけ骨がおれたか、そのために石と石でおのを作ったりした先人の努力のあとがまざまざと再現された。

○四年の例

開かれていく農村の場合。昔の人が害虫駆除をする際、たくさんの村人ののぼりを立て鐘やドラをはやして隣村まで虫をおい出すといういわゆる「虫おくり」を劇化するときい虫になる子供の動き、他村の人との関係、当時の服装農民の苦労、このような事がそれを演ずる子供に、又それを見つめる子供たちに次から次に考え出され、問題が次々に発生し子供たちの自由な表現の中にその迷信の馬鹿らしさ、当時の文化程度やそうした、時代における人々の苦心が究明され郷土の生活の学習が一段と深められた。

○五六年の例

江戸時代の交通のさい、大名行列と民衆の土下座、関所の場などを劇化することにより、人間が人間として扱はれず、全てが徳川幕府のための制度であった封建社会の事柄が自分たちの身体を通してはっきりと理解される。

以上社会科学習にえんげきを取り入れた場合の例をいくつかあげて見たが、こうした立場で銅山のしくみの場、坑内の様子をやらせて見た。

別にこれといった道具をもつわけでなく教室の片すみで「さく岩機」を使う様子、爆破、運鉱の所、こうしたことを演じさせて見た。たったそれだけの事から坑道とくに鉱石をほっている場所の広さは如何、人は何人位いるか、坑道の長さはどの位あるか、わき出て来る地下水はどうするのか、新しい空気がなくなりはしないか　又らく盤の危険はどう防ぐか、といった問題が次から次へと考へ出され、教師の一方的な解説の場合と比べて非常に学習意慾をもち自分たちの問題として考えるようになり図書館の本を見つけたり或は家人にきいたりして、とにかく熱をもった学習がなされた。そして足尾の人々の生活の工夫の様子がよく理解され足尾の特色をつかまえる事ができた。

㈢栃木県の工（鉱）業（省略）

㈣県庁のある宇都宮市

足利　足尾の学習を終り次の「栃木県の工鉱業」を概観しそして宇都宮に入る。

これも足利市をもとにしてその広さや人口、町のはたらき等を学習していったが、いつも足利のそれと比較して見るとき子供たちの理解が非常に早い、六十頁の産業別人口グラフは前の場合のように円グラフに直して提示したら、理解しよかった。そして二月現在宇都宮の学習を展開中です。

㈤日本の大きな町

県内の大きな町（資料集宇都宮市の終りの方に出ている程度）を概観し県内の特色をはっきり

つかまえた上で教科書により日本の大きな町のいくつかを教科書をよむ程度に軽くふれ、郷土の特徴を一そう明確にしてこの単元を終りにする予定です。

教科書は学習の方法を示してくれると共に日本全体の立場で各地の様子を扱っているので比較教材として活用できると思う。

おわりに

以上単元の展開について特に問題になった点について詳細述べてきたが、とにかく子供が問題を自分の問題として学習してこそ始めて実のある学習がされると思われる。

そのためにはいくつもの方法が考えられるが

1. 身近な問題、切実な問題をなげかけること
2. 環境の設定をしてやること
3. 視聴覚教具を活用する
4. 教科書の正しい位置づけと活用
5. 時に劇化を試みる

このような工夫をすることにより子供たちの学習がより活潑化すると思はれる。

勿論そのさいの問題はどこまでも社会科本来の目的である社会生活の正しい理解とその中における自己の立場の自覚、そして自分達の社会の進歩向上をめざす～この大きな目標を教師がはっきりとつかまえて、単なる調査や研究のみの学習に終ってはならないと思う、そしてその目的達成のために資料を集め之を利用したい。

今度出されたこの資料集もこうした目的で作られたものと思う。然しいつもこの通り、このまま単元を展開するのでなく、自分たちの学校の地域の実態、子供の実態、子供の欲求にもとづいた学習計画が立てられ、それにこの資料集の中にある各種の資料の利用をすることが本当だと思います。

長々と記録をしたためましたが皆様の御指導がいただければ幸いです。